

海上自衛隊創設60周年記念式典 祝辞

杉本海上幕僚長、海上自衛隊の隊員諸氏、ならびにご来賓のみなさま。海上自衛隊創設60周年にあたりまして、一言お祝いの言葉を申し述べます。

昭和27年、1952年4月26日、海上保安庁法の一部を改正する法律が公布され、運輸省の外局として海上警備隊が発足したとき、国民多数は、おそらくほとんど注意を払いませんでした。同じ日、最終追放解除が行われ、2日後には講和条約が発効し、日本は主権を回復します。

占領が終わり、平和が確定し、独立国として再出発したこの時期、基幹要員以外には隊員も艦艇も存在しないこの新しい組織が、どのような任務を与えられ、どのような役割を果たすか、あるいは果たせるかについて、明確な見通しを持っている人は、おそらく部内にもあまりいなかったでしょう。

まして60年後という遠い将来に、海上警備隊の後身である海上自衛隊が世界有数のネイビーとなり、我が国の海上防衛のみならず、世界の海の平和と安定に大きな役割を果たすようになるなど、夢のまた夢であった。そう想像します。

けれども、海上自衛隊は、当時の国際情勢の激変や米国の政策変更など、他律的な理由によって発足したのでは決してありません。むしろ敗戦からおおよそ7年、野村吉三郎大將をはじめとする帝国海軍の元指導者たち、海軍解散後全国に散りながら再び参集した若い士官たちが、ネイビーの再興という明確な意思をもって、きわめて自立的に生み出したものだと言えましょう。占領下の日本が再び独立を回復した暁には、自らの力で国を守らねばならない。

そのためには海軍が必要であり、海軍を復活させねばならない。

彼らはそう固く信じていました。そしてこの日、ようやくその端緒についたのです。

ただし彼らは、すぐに厳しい現実と直面します。憲法、法律、政治、予算、装備、人員など、あらゆる面で海上自衛隊には大きな制約が課せられ、Y委員会のメンバーが構想したフルスペックの海軍が、すぐによみがえるはずもありませんでした。

またかつての敵であった米海軍は、発足以来頼もしいパートナーとなり、アーレイ・バーク提督をはじめ米海軍の将兵は友情と支援を惜しまなかったものの、海上自衛隊を自分たちと互角の能力をもつ一人前の海軍とは、長く認めませんでした。70年代に入っても状況は変わらず、自衛艦隊の幕僚の一人が米海軍関係者から「海上自衛隊はトレーニング・フォースであって実力部隊ではない」と言われ、悔しがって帰ってきたことがあったと、当時同艦隊司令官であった中村悌二元海上幕僚長が語っておられます。

そうしたさまざまな制約のもとで、海上自衛隊の先輩たちは黙々と訓練を重ね、術科の力をみがき、戦略を構想し、いざという時に備えました。そしてその人たちの日々の営みの積み重ねが、今日の海上自衛隊を生み出したのです。

山梨勝之進海軍大將は、ともすれば厳しい現実には直面して挫折感を抱く海上自衛隊草創期の若き幹部たちに向かって、「海上自衛隊は艦も飛行機も少ない。装備も施設も誠に不十分である。しかし人がある。諸君こそ、海上自衛隊の何ものにも換え難い資産である」と述べられたそうです。

海上自衛隊の60年を振り返りますと、それは何にもまして、その形と精神を築き、ネイヴィーとしての力を蓄え、あとに続くものたちに「願います」と短く言って去った、殉職者をふくめ、世の中ではあまり知られていない、幹部、一般隊員、その他、多くの人々の歴史と思い出である。そう強く感じます。

考えてみますと、海上自衛隊の前身である帝国海軍は、1945年に解散したとき、創設から約75年の歴史を重ねていました。海上自衛隊はあと15年経つと、その長さを超えます。帝国海軍の栄光についてはさまざまに語られていますけれど、最終的には先の大戦で壊滅的打撃を受けて敗北し、その根本任務である国の護りを果たせませんでした。対米戦争に突入した政治家や外交官の当事者責任はともかく、海軍もまた失敗を犯したといってよく、安易に美化してはならないと思います。

戦後に誕生した海上自衛隊は、その反省の上に立って、民主主義のもと、国民の支持を前提に生まれた組織です。幸いにも、戦後67年のあいだ、我が国には戦がありませんでした。肝心の国民の理解を近年までなかなか得られないなど、いろいろ難しい問題をかかえながら、海上自衛隊は今日の堂々たる姿にまで育ちました。同盟国アメリカの海軍との緊密な関係は言うまでもなく、各国海軍から尊敬され、頼りにされる存在です。昨年、東日本大震災でみられたように、陸上自衛隊、航空自衛隊とならんで、国民の支持もかつてとは比べものにならない、堅実かつ温かいものになりました。

しかしそれで安心することはできません。日本がこれからも戦わずにすむのかどうか、わかりませんし、海上自衛隊が、いざというときなすべき仕事をなせるのかどうか、確実なことは言えません。ここ数年、我が国では思いもかけなかったような事態が次々に起こりました。限られた予算と人員の範囲で、海上自衛隊の果たすべき任務と役割はますます複雑に、また難しくなっています。皆さまのご苦労に敬意を表する次第です。

本日我々は、海上自衛隊が60年という歳月を刻んだことを祝うために、この場所に集まりました。しかしこのめでたい時にあたって、我々は、かつて勇猛果敢に戦いながら、海に没し、海に散り、故国を守り切れなかった帝国海軍無数の将兵のことを肅然と思わざるを得ません。また草創期以来、海上自衛隊にあって、さまざまな困難を乗り越えながら、将来につながるために黙々と任務を果たし、多くの隊員が命さえ落とした、諸先輩のことを、深い感慨をもって思わざるを得ません。

南北戦争のさなか、多数の死傷者を出したゲティスバーグの戦いのあと、リンカーン大統領はあの有名な演説のなかで、次のように語りました。

「生き残った我らがなすべきは、ここで戦った者たちが志なかばでやり残した貴い仕事に、新たな決意で取り組むことである。

生き残った我らが取り組むべきは、行く手に控えている偉大なる使命を成し遂げる
ことである。名誉の戦死を遂げた者たちが、最後の力をふりしぼって果たそうとし
た使命を、我らはいっそうの献身をもって果たさんとす」

海上自衛隊のみなさん。国を守る、国民を守るという、重大で貴い使命を、これ
からも果たされ続けられんことを。

国民の一人としてそれをお願いして、海上自衛隊創設60年に際しての、私の祝辞
といたします。

平成24年4月26日
阿川 尚之